

「悪魔のささやく」の素描

—— 訳語「悪魔」のヴィジュアル性・身体性から

「ささやく」に結びつくまで ——

塚 本 泰 造

本稿は、聖書の翻訳によって生まれた訳語「悪魔」のコロケーションを対象として、その成立の可能性から、大きく2点、ヴィジュアル性と身体性を指摘し、訳語の日本語化に関する先行研究を補うものです。

一、「悪魔のささやく」を対象とする理由

聖書の訳語「悪魔」は、鈴木範久(二〇〇六)によれば、「愛」や「神」「隣人」と同じく、聖書の言葉の日本語化・一般化の目安となる30語のキーワードの一つとして位置づけられます(pp.77-80)。

聖書の言葉の日本語化については、現在、大きく3つのことが分かっています。

① 中国語訳聖書から採用した言葉の影響が大きい

② 文語訳聖書、いわゆる大正改訳版(一九一七年発行)の訳語の寄与が大きい

③ 従来あった同じ形態の日本語に、意味の変容をもたらしたケースがある

①については、早く御法川恵子(一九六五)、森岡健二編著(一九六九)があり、柳父章(二〇〇一)、鈴木範久(二〇〇六)などが代表的なものでしょう。

特に、今回取り上げる訳語「悪魔」については、尊田佐紀子(二〇〇二)、加藤早苗(二〇〇九)に詳しい分析がなされています。その結果によると、中国語訳の新約聖書において、墮落へ誘惑するものとしての悪魔 *diabolos* は「魔鬼」、取り憑く悪霊としての悪魔 *daimonion* は「悪鬼」「鬼」などと訳し分けられていましたが、日本語訳では、いわゆる明治元訳版に、前者には従来からあった漢語「悪魔」が採用され、後者には大正改

訳版まで統一した訳語がなかったと報告されています。なぜ、わざわざ権威ある中国語の訳語を避け「悪魔」を使ったかにについては、尊田(二〇〇一)に、中国語訳に共通する漢字「鬼」による混同を避け、概念の近いものとして当時の日本人にわかりやすい言葉として「悪魔」があつたからだ、という重要な指摘がなされています。

②について、文語訳聖書に対する文学的・文体的な定評は周知の事実でしょう。柳父(二〇〇一)では、文語体の方が口語訳における単調な「うた」の連続よりも多彩な文末を持ち、中国語訳(漢文)の構文に従って豊富な和語が駆使されている点にその魅力を求めています(pp.157-161)。鈴木(二〇〇六)では、キーワード30語のうち大正改訳版の訳語は27語が現在も使われていること、ことわざ同然に使われる聖句はほぼこの版のものであること(「目には目を、齒には齒を」「求めよ、然らば与へられん」「一粒の麦、地に落ちて死なずば」「目より鱗」など)が指摘されています(pp.141-147)。ただし、この大正改訳版に見られる「悪魔」は漢語であり、その聖句があるかどうかは示されていません。

③については、鈴木広光(二〇〇五)では「神」、鈴木(二〇〇六)では「神」「聖霊」「愛」「隣人」「義」が挙げられています。それでは「悪魔」はどうかというと、惣郷正明・飛田良文編(一九八六)では、明治時代になってから、キリスト教の「悪魔」の意味が辞書の記述に採用されていることが示されて

いるのみです。また、加藤(二〇〇九)に言及がありますが、例証を伴った詳しいものではありません。

これらの先行研究から、訳語「悪魔」に関して補うべき点が二つ指摘できます。それは、残されている領域と方法についてです。

まず、訳語「悪魔」の、いわば導入過程については詳しい分析がなされていますが、それがどのように日本語に定着していったのか、かつ、仏教由来の用語「悪魔」を変容させたのかどうか明らかではありません。

次に、何をもって日本語として定着したとするかが問題です。鈴木(二〇〇六)では、代表的な国語辞書への登載、書名への応用などが測定物差しとして使われています。しかし、国語辞書に載ったからといって、その言葉がその時代に生き生きと使われていたとは限りません。後で述べるように、用例として「悪魔のささやき」が記載されるのは、実際に使用され始めたころよりかなり遅いのです。いわゆる「人口に膾炙する」と「辞書に載る」との差が、その時代の検索可能環境によって左右されるわけです。書名においても、その命名者が死語を復活させるかもしれません。

現在では、さまざまなジャンルや文献のコーパスが整いつつあります。聖書も例外ではないようです。「悪魔」に「ささやき」が結びつく条件の、ある程度の測量と展望が、個人の作業によるものであっても十分可能だと考えられます。

本稿では、聖書の翻訳語「悪魔」が日本語にどう定着しているかを測るために、コロケーション「悪魔のささやき」を対象とします。次節以降に述べるように、在来の、いわば土着の「悪魔」が「ささやく」ことはなかっただろうと判断されるにもかかわらず、少なくとも大正以降、「悪魔」が「ささやき」と結びついているからです。

二、コーパスで見る「悪魔のささやき」

二一 辞書の記載から

おそらく、誰もがよく知っている「悪魔のささやき」の使用例は、国語の教科書に長く採用されてきている太宰治「走れメロス」の次の一節でしょう〔一〕。

私は信頼されている。私は信頼されている。先刻の、あの悪魔のささやきは、あれは夢だ。悪い夢だ。忘れてしまえ。五臓が疲れているときは、ふいとあんな悪い夢を見るものだ。メロス、おまえの恥ではない。やはり、おまえは真の勇者だ。

ここで太宰が想起している「悪魔」が、仏教の「魔」、降伏すべき「悪魔」であるとは考えにくいでしょう。周知のように、

太宰治とキリスト教、聖書との結びつきは強いものです。

「走れメロス」は一九四〇年に発表されました。しかし管見では、辞書類において、「悪魔」の代表的な用例の一つとして、最も早く「悪魔のささやき」もしくは「悪魔がささやく」を明記しているものは、林史典・鶴岡昭夫編（一九九二）でした。

文例〈悪魔がささやく〉

だれも見っていない、盗んでしまえと、悪魔がささやいた。

また、「悪魔のささやき」に限れば、中村明編（一九九六）が、最も早くこの結びつきを示しています。コロケーションを扱ったとみられる辞書類は、一般的な国語辞典より早くこのコロケーションに関心を示しており、例えば姫野昌子編（二〇〇四）・小内一（二〇〇五）にも載せられています。

一方、一般的な国語辞典で最も早く「悪魔のささやき」を載せているものは、管見では『小学館 日本語新辞典』（二〇〇五）であり、生きのよい国語辞典と評される『三省堂国語辞典』が「悪魔のささやき」を登場させるのは、二〇〇八年の第六版からです。

試みに、青空文庫を検索すると、「悪魔のささやき」の例は「走れメロス」以外に8例²見つけられます（二〇一四年十月二十八日現在。えあ草紙による）。その中で最も古い用例は、一九一八（大正七）年発表の、岡本綺堂の小説「玉藻の前」で

した。

このタイムラグの二因は、次節で述べるように、「悪魔のささやき」がやや俗っぽい表現であるため、一般的な国語辞典に採用されにくかったからだと考えられます。

二二 現代語のコーパスの結果から

現代日本語書き言葉均衡コーパス「中納言」において、「悪魔のささやき」は16例あります⁽³⁾。

図書館・書籍 5例 (ただし1例は青空文庫と同じ大阪圭吉の用例で戦前のもの⁽⁴⁾)

出版・書籍 4例⁽⁵⁾ 特定目的・ブログ 3例

特定目的・知恵袋 3例

また、教科書に1例見られますが、これは「走れメロス」の用例でした。

ブログや知恵袋の用例が3分の1を超え、書籍も堅い文体のものがないので、「悪魔のささやき」は、一般に軟らかい文体で使われる、俗っぽい表現であろうと考えられます。

さらに、検索条件の後方共起2に「名詞」を加えると417例「悪魔の」+「名詞」の型が抽出できます。そのうち一番多い名詞が「囁き」「ささやき」の16例であって、次に多いのが⁽⁶⁾

「力」8例・「声」7例・「しわざ」7例・「手」7例です。

次に、日本最大の歌詞のコーパスサイト「うたネット」の歌

詞全文検索の結果によれば、文字列「悪魔」を含む曲は1033曲、そのうち「悪魔の」+「名詞」という型を含む曲は、34曲です(二〇一三年十月三日時点の検索)。表1に示すように、「悪魔の」+「ささやき」「囁き」も含める⁽⁷⁾が一番多い結びつきであって、37曲に上ります⁽⁸⁾。およそ1割以上、10曲「悪魔の」があれば、1曲は確実に「ささやき」と続けるわけです。

語	曲数
囁き	37
声	15
翼	7
しわざ	6
手	5
餌食	5
誘い	4
夜	4
カード、国	3
使い、翼、手先	3
笑顔、お城	2
顔、影、キス	
軍団、心、夢	
言葉、世界	
爪、プレゼント	
ほほえみ、誘惑	2

表1 悪魔の+「名詞」に使われた語

* 2曲以上使用された語に限定

以上の結果からすれば、現代において「悪魔のささやき」が「悪魔の」+「名詞」という型の中では、代表的なものであることがわかります。また、このコロケーションは、歌詞に代表されるような、やや俗っぽい、大衆的な、軟らかい文体における表現であると言えます。

ということ、普段のことばで、宗教上厳密なものではない、大衆の「悪魔」の受け入れ方を測るにあたっては、「悪魔のささやき」という結びつきは最適なものの一つであると言えるで

しょう。

その「悪魔」が、「ささやき」や「声」と強く結びついているのですから、「悪魔」という存在が、まずもって「音声」を感じるような、あるいはその程度の身体性を帯びているようなものとして、把握されていると予想できます。

それでは、文語訳聖書で「悪魔」は囁いているでしょうか？

三、聖書の「悪魔」は物を言い、囁かない

大正改訳版「聖書」の中で、「悪魔」はどう振る舞っているか、言い換えれば、どのような動詞と結びついて翻訳されているでしょうか。

この新約聖書において「悪魔」は35箇所使用されています^⑧。そのうち悪魔の振る舞いは次の動詞で表現されています。

試みる 4例 連れ行く 3例 言う 3例 惑わす 3例
入れる 2例

以下1例のもの 離れ去る・時く・携える・離れる・来る・奪う・入る・制する・得る・(裁きを)受ける・捉える・経巡る・尋ねる・犯す・落ちる・下る・知る・抱く

したがって、悪魔は物を言って惑わしますが、囁いてはいな

いことになります。

旧約聖書では、悪魔に相当するものは「サタン」と表されていますが、神エホバの側に立ち、その問いかけに応えるものであり、性格が異なります^⑨。共通する動詞は、

言う 来る

の2語でした。また、サタンとは表現されていない、イブをそのかした蛇は、「蛇婦へびまんに言けるは」(創世記 3-2, 3-4)とあって、同じく「言う」です。

同じく文語で出版され、後世に大きな影響を与えた『新撰讚美歌』(二八九〇(明治二三)年刊行^⑩)では、次のような結果となります。

第五十七の4番「あくまのとりこ」、第六十八の4番「サタナをうたなん」、第七十の1番「サタナのつよきをしらば」、第七十九の1番「サタナはほろびぬ」、第三百三十三の1番「サタナのくにを」、第四百七十五の2番「サタナにうたれて」、第二百三十五の4番「サタナの手にとらはれしむる」

同じく囁かないことがわかります。

これらの結果からすると、「悪魔」は物を言い、その内容は邪な事を含むけれども、囁く形はとらなかつたということになります。多くの動詞が示すのは、悪魔が肉体を持って、いわば「示現」してさまざま振る舞いをしていくことです。したがって、聖書からすれば、「悪魔の手」「悪魔の誘惑」などの結びつきの方

が正統的であると考えられます。

同じ聖書では、「ささやく」(「囁く」「私語く」「耳語」「細聲」^{さいせう})「細語」^{さいご}主体は、人であり群衆です¹¹。例えば、敵意をもってひそひそ話をする人々です(詩篇41-7 すべてわれをにくむもの互ひにささやき我をそこなはんとて相謀る^{あひはか})。明治以前の日本語文献で「ささやく」主体は何であったでしょうか。

四、身体性とヴァジュアル性

四— 古典文学での「ささやく」——悪の所作へ

ここでは、何よりも悪魔のような超自然的な存在が「ささやく」のかどうか条件になりますので、明治以前の日本語文献を古典文学作品で代表させます。悉皆的な調査はまだできていませんが、旧古典文学大系のデータベースと大蔵虎明本狂言集の総索引を使って、おおよその傾向を探ってみます。

その調査結果を表2(次頁)に示します¹²。

この結果及び具体的な用例から、おおよそ2つのことが指摘できます。

- ① 人が「ささやく」ものであること
- ② 具体的な所作を含む用法が増えてきていること

①については、(聖書に見られるように)不特定多数の人間がいろいろ噂しようが、一人の人間が囁きかけようが、二者が親密に内緒話をしようが、とにかく人が「ささやく」ものだということです。

例外的な能「正尊」の用例も、宿のようすが「どどめいて」いたりその反対に「ひそひそとして、ささやき回」ったりなどする、「ものすさまじき」形容として使われているので、主体が不特定多数の場合の比喩的用法と考えられます。

キリシタン関係の文献では、「悪魔」は「天狗」「天魔」と訳されています。では、「天狗」や「天魔」は「ささやく」のかというと、旧大系の古典文学作品群にはそういう結びつきが見られません。唯一、ニアミスとも言えるのが、次の義経記の用例です(以下、大系の本文は、論証に支障のない範囲で表記を一部改めて引用します。傍線は塚本)。

すべて男の頼むまじきは、女也。昨日までは連理の契、比翼の語らひ浅からず、如何なる天魔の勅にてやありけん、夜の程に女心変りをぞしたりける。…今の男と申は、世にある者なり。忠信は落人なり。世にある者と思ひ代ゆべしと思ひ、…その後耳に口を当てて囁きけるは、「呼び立て申事は…」

(pp.243-244)

女の心が豹変したのは、「天魔」が勧めたせいかもしれない、

ささやく			
主体 = 人間			主体 =
時代	主体が不特定多数	主体が単体	主体が双数・双方向
平安	竹取物語 59	大鏡 裏書115	
計	1	1	
鎌倉	宇治拾遺物語 313、427 愚管抄 217、258 保元物語 57、62 平家物語 上 116 220 346 376 392 402 404 407 平家物語 下 125 166 曾我物語 88	愚管抄 281 平治物語 293 曾我物語 349 曾我物語 57 66 84	愚管抄 180 平家物語 上 158 曾我物語 348
計	17	6	3
室町	義経記 334 太平記 2 38 51 161 285 289 309 313 314 太平記 3 90 198 343 小町草紙 95 文正そうし 52	義経記 244 341 太平記 2 306 450 太平記 3 409	義経記 254
計	14	5	1
江戸	虎明本 中253 308 戴恩記 41 世間胸算用 203 堀川波鼓 61 傾城禁短気 260 孔雀楼筆記 294 遊子方言 287 江戸生艶気樺焼 139 徳和歌後万載集 382 一茶集 文集 514 父の終焉日記 420 鶉衣 373 400 東海道中膝栗毛 292 461 椿説弓張月 上 281	虎明本 上384 中207 きのふはけふの物語 123 好色一代男 89 92 97 135 145 戴恩記 68 92 日本永代蔵 66 軽口露がはなし 238 好色万金丹 104 106 123 新色五巻書 416 485 曾根崎心中 29 心中重井筒 89 丹波与作待夜の小室節 118 けいせい反魂香 141 傾城禁短気 161(2) 217 国姓爺合戦 257 八百屋お七 87 山崎与次兵衛寿の門松 315 平家女護嶋 328(2) 329 心中天の網島 363 夏祭浪花鑑 227 仮名手本忠臣蔵 347 幼稚子敵討 114 181(3) 182 263 助六 87 128 遊子方言 284 役者論語 549 伽羅先代萩 333 334 徳和歌後万載集 366 敵討義女英 230 無事志有書 458 一茶 連句 386 名歌徳三舛玉垣 102 胆大小心録 334 春雨物語 205 お染久松色読販 252 256 槐記 481 東海道中膝栗毛 274 304 471 492 椿説弓張月 上 93 140 188 200 285 294 椿説弓張月 下 143 174 220 223 291 313 浮世風呂 187 春色梅児替美 101 160 春色辰巳園 260 314	世間胸算用 280 丹波与作待夜の小室節 105 堀川波鼓 48 傾城禁短気 367 夕霧阿波鳴門 213 (神二仏) ひらかな盛衰記 128 夏祭浪花鑑 233 夏祭浪花鑑 279 菅原伝授手習鑑 75 東海道中膝栗毛 461 椿説弓張月 下 54 春色梅児替美 102 通信絵巻 354 春色辰巳園 332
計	17	75	14
総計	49	87	18

* 表中、「主体が双数・双方向」というのは、「二者が暗きあっていること。作品名の後の数字はページ数。(一)は同一ページに2つ以上使われている場合の用例数。

表2 「ささやく」の主体別分類

* 虎明本には他にト書きの「ささやく」が4例ある

ということ、間接的に囁いていると解釈できなくもないのですが、あくまで断定ではありません。

②について、主体が単体の場合、先ほど引用した義経記の用例のように、「耳に口を当てて」というような具体的な所作が付け加わることがまま見えてきます。

いかがせんとて、ひそかに箱根にのほり、別当に見参して、
ちかくいよりて、さ、やきけるは、
(曾我物語 p.57)

こんな事ぢやと耳に口よせ。かうぢやくとさ、やけば。
(平家女護鳥 p.328)

トみ、へ口をよせて中にながしてゐる女を横目で見ながら
小声にさ、やく
(浮世風呂 p.127)

美女は彼女童が耳に口をよせて、何事やらんしばし私語
ば、
(椿説弓張月 上 p.188)

ト女の耳にくちをよせ、なにかさ、やけば、
(春色梅児誉美 p.160)

ト仇吉が耳に口を寄せ、何かひそくとさ、やきて
(春色辰巳園 p.314)

これらは、「囁く」行為が声の低さ・小ささだけでなく、身体
のより分節された動作として把握されつつあった事を示してい
ます。既に大蔵虎明本狂言集にト書きの「ささやく」が多かっ
たように、あるいは演劇系の芸術の発展が、その背景にあるか
もしれません。

「ささやく」主体には、あたりまえのことですが、言葉にす
る上でも身体が必要であるわけです。

四一「悪魔」が「ささやく」には

加藤(二〇〇九)は、次のような重要な指摘をしています。

キリスト教における「悪魔」が人格的存在であるのに対し
仏教での「悪魔」は心に内在する無形存在であり、霊的
存在として姿を持たないキリスト教の「鬼」に対して仏教
の「鬼」は容姿を纏った存在であるとも言える。

聖書の訳語「悪魔」は「人格的存在」、今までの考察からす
れば、多くの動詞を携えた、種々の動作を豊かに行える身体を
持った存在です。その動作の一つに「言う」ことがありました。
一方、仏教における「悪魔」は「無形存在」であり、形を
持たないが故に、生身の人間に直接感知できる「ささやく」を
担うには、身体性とそれを意識させる形(ヴィジュアル性)が

希薄であり、不足していたわけですから。目に見えるような、感知しやすい動きがないことになります。

他者に何かを言うといった行為のうち、「ささやく」が邪なものともなっており、種々の動作を伴って意識される状況にまでなった時に、既製の「悪魔」よりも、より身体性に富み、ヴィジュアル性の豊かな存在が求められて、そこに「悪魔」が「ささやく」こと、格好の座があったと考えられます。はつきりと音声表現でできる資格が訳語「悪魔」には付いていたからです。

おわりに

以上、粗略な考察の中で、聖書の翻訳語「悪魔」の日本語化を「悪魔のささやく」から描いてみました。

「悪魔のささやく」には、仏教もしくは土着の文化とキリスト教との混交した表現が見られます。なぜなら、聖書における「悪魔」は、囁くどころかはつきり物を言い、さまざまに動作を行う、人目に明らかな存在です。無形の存在ではない、「人」が「ささやく」という下地があって、その囁く行為に悪意を見出せば、「人」の位置に、豊かな身体性とヴィジュアル性を持つ外来種がはまりやすかったのだと考えます。

一面、「悪魔」は歴史的断絶から、音声を発するぐらいには知覚できる「もの」となっているでしょう。「悪魔の肉声」にまで拡張するかもしれません。

【注】

(1) 本文は、中学校2年の教科書である、光村図書「国語2」より。

(2) 8例の内訳は、「玉藻の前」(岡本綺堂)「バルザックの寝巻姿」(吉行エイスケ)「音楽的映画としての『ラウ・ミ・トゥナイト』」(寺田眞彦)「十六日」(宮沢賢治)「狂言の神」(火の鳥) (太宰治)「寒の夜囁れ」(大阪圭吉)「鸚鵡」(白鳳)「第二部」(神西清)です。また検索文字列は「囁き」「ささやく」「さ、やく」。

(3) 検索は、短単位検索によって、語彙素読み「アクマ」に後方共起1語彙素読み「ノ」・後方共起2語彙素読み「ササヤキ」を加えて行ったもの。

(4) 図書館・書籍5例の内訳は、

千住 文子・千住 真理子『母と娘の協奏曲』時事通信社 2005
湯川 裕光『安土幻想』廣済堂出版 2002

堀 紘一『サラリーマンなんか今すぐやめなさい』ビジネス社 2004

大阪 圭吉『日本探偵小説全集』12 東京創元社 1989

寺田 敏雄『ジェラシー』下 ティ・アイ・エス 1993

(5) 出版・書籍4例の内訳は、

瑞 やえ子『神様がくれたプレゼント』文芸社 2004
川端 裕人『ニコチアナ』文藝春秋 2001

徳光 正行『せんえつですが。』幻冬舎 2003

広畑 史朗『警察の視点社会の視点』啓正社 2004

(6) 厳密に言うと次に多いのは「飽食」の13例なのですが、これは「悪魔

の飽食」という小説名であり、同一著者兼作者のデータであることがわかりますので、ハイパスとみなし、ソングでは省きました。

(7) その37曲では、

- じゅ 手さ田ちゃん (UKASUKA-G) / GIMME GIMME GIMME (Tommy february6) / LOVE LOVE LOVE LOVE!! (榎本へるま) / ゲルケの舞踏 (Astrid) / answer (Janne Da Arc) / Strange Voice (Janne Da Arc) / 恋愛の十ヶ条 (POSSIBILITY) / CHALLENGER (CHEHON) / ZEUS (HAKUEI) / What's My Name? (Heartsdales) / 月十番 (Versailles) / 無敵な愛 (YONGRI) / プラットナーケット (FLOW) / ブルー・ロヴァー・ブルー BLUE LOVER BLUE (へるり) / 口唇 (GLAY) / Lucid dream (荻原真知) (CHEMISTRY) / 片じゅん別なユー (MEN ☆ SOUL) / POISON (マース・シトーカー) / 陽はまた昇る (K DUB SHINE) / 夏の光 (eastern youth) / 旅 (ファンタカシマシ) / 化ケモノ青年 (エレファンタカシマシ) / 僕らのハーモニ (原田真二) / この恋から (LOOP CHILD) / 甘い恋 (小島麻由美) / ビストル (小日向しえ) / じゃけなさい・2・3 (大国男児) / 薔薇の悪魔 (美川憲一) / パノラマ・Panorama (水樹奈々) / 白夜 (THE BACK HORN) / おはよう日本 (コーズ・ストリート) / おねだり大作戦 (BABYMETAL) / 黒蜥蜴の唄 (美輪明宏) / sins (Acid Black Cherry) / JUST ONE MORE KISS (BUCK-TICK) / HANDLE ME (安部奈美恵) / Stands Up feat. 柿田来未 (Clench & Bistrah)
- (8) 35箇所の内訳は(数字は「章・節」)
ブライ伝 41 45 48 411 1339 2541

ルカ伝 42 43 45 49 413 812

モンネ伝 670 844 132 1327

使徒行伝 1038 1310

ヘレン書 427 611

テテテ前書 36 37

テテテ後書 226

クトル書 214

ヤコブ書 47

シテロ前書 58

モンネ第一書 38 310

ユダ書 19

モンネ黙示録 210 129 1212 182 202 2010

(9) 池内(一九九二)の次の指摘が端的なものでしょう。

旧約聖書は、悪魔や魔王といったものについて何も知らないのだ。それが人間に働きかけて悪へと惑わすこともない。エデンの園でイヴを誘惑したのは、ヘビに姿を変えた悪魔のしわざとなっているが、そのように考える根拠はテクストの中にはないのである。(pp.2728)

(10) 明治元訳版聖書の刊行(一八八八年)と同時期になります。

(11) 旧約(撒母耳(サムエル)後書 12:19 約百(ヨブ)記 4:12 26:14

詩篇 41:7 以賽亞(イザヤ)書 8:19 59:3) 新約(モンネ伝 7:12

7:32)

(12) 検索文字列は「ななや」「ななや」「サヤ」「サヤ」「私語」「耳語」。その検索結果から、動詞の確例を抽出しています。なお今昔物

語集の場合は、「私語」を古辞書の訓を援用して「ささめく」と訓んでいるので、不確定なものともみなし、表から省いています。

【参考文献】

- 池内 紀 (一九九二) 『悪魔の話』 講談社
小内 一 (二〇〇五) 『日本語表現大辞典 ― 比喻と類語三万三八〇』 講談社
加藤 早苗 (二〇〇九) 『明治期和訳聖書における聖書用語 ― 「悪魔」と「鬼」―』 『岐阜聖徳学園大学国語国文学』 二八号
鈴木 範久 (二〇〇六) 『聖書の日本語』 岩波書店
鈴木 広光 (二〇〇五) 『神の翻訳史』 『国語国文』 第七四巻第二号
惣郷正明・飛田良文編 (一九八六) 『明治のことは辞典』 東京堂出版
尊田佐紀子 (二〇〇二) 『明治期日本語訳聖書における訳語「悪魔」について』 『語文研究』 九一号
中村 明編 (一九九六) 『文章プロのための日本語表現活用辞典』 明治書院
林史典・鶴岡昭夫編 (一九九二) 『15万例文・成句現代国語用例辞典』 教育社
姫野 昌子編 (二〇〇四) 『研究社 日本語表現活用辞典』 研究社
御法川恵子 (一九六五) 『聖書和訳とその訳語についての国語学的研究』 『日本文学』 二五号
森岡 健二編著 (一九六九) 『近代語の成立 ― 明治期語彙編』 明治書院
柳父 章 (二〇〇二) 『ゴッド』 は神か上帝か』 岩波書店 (筑摩書房より)

一九八六年発行されたものの文庫版。本稿では文庫版を参照した

【使用テキスト】

- 『文語訳 新約聖書 詩篇付』 岩波書店
新日本古典文学大系明治編12 『新撰讚美歌』 『新体詩 聖書 讚美歌集』 岩波書店
『真理子修道会心接室』 <http://www.babelble.net/pdf/pdfmar.cgi>
池田廣司・北原保雄 『大蔵虎明本 狂言集の研究 本文篇』 上中下、表現社
北原保雄他編 『大蔵虎明本 狂言集総索引』 1～8、武蔵野書院
【検索及びコーパスサイト】
うたネット http://www.uta-net.com/user/index_search/search1.html
えあ草紙 <http://www.satokazz.com/books/>
現代日本語き言葉均衡コーパス [中納言]
国文学研究資料館・大系本文データベース <http://base3.nijl.ac.jp/>
聖書検索サイト DTWorks <http://www.satokazz.com/books/>

（つかもと たいぞう）

大学院文学研究科第一四回修了／宮崎大学教育文化学部